公益社団法人
日本語教育学会
Association for Japanese Language Education

2025 年度第 3 回支部集会【関西支部】

主催：公益社団法人日本語教育学会
後援：追手門学院大学

日　　時：2026 年 3 月 7 日（土） 10:00～16:45 （受付開始 9:30）
会　　場：追手門学院大学 茨木総持寺キャンパス
昨年度と会場は同じですが、建物が違いますのでご注意ください。
本年度は、「ACADEMIC BASE」という建物で実施いたします。
https://www.otemon.ac.jp/guide/campus/campusmap/soujiji.html
アクセス：JR 総持寺駅より徒歩 15 分
阪急茨木市駅から近鉄バスがキャンパス前まで運行しております。（乗車時間約 16 分）
【行き】 阪急茨木市駅 → 追大総持寺キャンパス前（花園・東和苑行き）
【帰り】 追大総持寺キャンパス前 → 阪急茨木市駅
https://www.otemon.ac.jp/guide/campus/access.html
※ 公共交通機関を利用してご来場ください。
参 加 費：1,000 円（マイページより事前参加登録時に支払い）
定　　員：100 名
対　　象：日本語教育に関心のある方ならどなたでもご参加いただけます。
申込締切：2026 年 3 月 1 日（日） 23:59（定員に達した場合は，締切日以前に締め切ります）
申込方法：**日本語教育学会マイページ** から事前参加登録をお願いいたします。

問 合 先：公益社団法人日本語教育学会 支部活動委員会
E-mail：shibu@nkg.or.jp TEL：03-3262-4291（平日 9～18 時のみ）

◆支部集会日程◆

9:30	受付開始（ACADEMIC BASE 2 階）	【BSC201 教室】
10:05～10:10	開会のごあいさつ	【BSC204 教室】
10:15～12:05	口頭発表（3 件） ＊10:45～11:00 休憩	【BSC204 教室】
12:05～13:10	昼休憩	【BSC205 教室】
13:10～14:40	ポスター発表（2 件）	【BSC202,203 教室】
14:50～16:20	パネルセッション	【BSC204 教室】
16:20～16:45	閉会のごあいさつ	【BSC204 教室】

公益社団法人
日本語教育学会
Association for Japanese Language Education

開会のごあいさつ　10:05～10:10　【BSC204 教室】

口頭発表　10:15～12:05　【BSC204 教室】

※本発表は査読審査を経た学会発表です。発表要旨は本プログラム p4～5。発表詳細は参加申込をされた「マイページ」から予稿集をダウンロードのうえ、ご覧ください。

前半　10:15～10:45　司会：亀田美保（大阪 YMCA 学院）

口頭発表１　10:15～10:45

「中上級学習者における日本語アスペクト「テイタ」の習得と指導法に関する研究」

紅露姫香（大原日本語学院）／中井延美（明海大学）

口頭発表２

＊当該発表は、発表者の都合により中止となりました。

後半　11:00～12:05　司会：久保田文子（京進ランゲージアカデミー）

口頭発表３　11:00～11:30

「『何を・どう教えるか』を問う：戦後識字教育研究の現在地と課題」

松下恵子（関西学院大学）

口頭発表４　11:35～12:05

「日常の声がつなぐ共生社会 ― 地域シンポジウムに見る市民の役割」

中井延美（明海大学）／紅露姫香（大原日本語学院）

休　憩　12:10～13:10 【BSC205 教室】

当日，学内の食堂・コンビニエンスストアの営業はありません。大学向かいのイオンタウン茨木太田をご利用ください。昼食会場として，BSC205 教室もご利用いただけます。

ポスター発表　13:10～14:40 【BSC202,203 教室】

※本発表は査読審査を経た学会発表です。発表要旨は本プログラム p6。発表詳細は参加申込をされた「マイページ」から予稿集をダウンロードのうえ、ご覧ください。

① 「日本語会話力向上のためのタスクベース AI アプリ『Gengobot』の開発　―インドネシア人日本語学習者を対象に―」

MUMU MUHAMMAD RIFAI（ムム　ムハッマド リファイ）（広島県立広島大学大学院生）

② 「難易度別メール文タスクの設計とその課題　―日本語教師による難易度判定から―」
金蘭美（横浜国立大学）／金庭久美子（目白大学）／橋本直幸（福岡女子大学）

パネルセッション　14:50～16:20 【BSC204 教室】

「関西日本語学校における多様な実践と課題」

日本語学校には、国籍や背景、学習目的の異なる多様な学習者が在籍しており、それぞれの学校は自校の教育理念や学習者の特性に応じて、特色ある教育実践を行っています。
本パネルでは、下記3名の先生方にご登壇いただき、各校の事例を通じて、学習者の多様なニーズに応じた教育設計の工夫をご紹介いただきます。そのうえで実践から得られる示唆や課題についてディスカッションいたします。

パネリスト　内田 さつき 氏（コミュニカ学院）
惟任 将彦　氏（大阪 YMCA 学院）
竹田 奈緒子 氏（京進ランゲージアカデミー大阪校）
司会　久保田文子（京進ランゲージアカデミー）

閉会のごあいさつ　16:20～16:45 【BSC204 教室】

関西支部集会は今回をもって終了となります。閉会にあたり、ここ 10 年間の関西支部集会の活動をふりかえります。

〔2025 年度第 3 回支部集会（関西支部）口頭発表１〕

中上級学習者における日本語アスペクト「テイタ」の習得と指導法に関する研究

紅露姫香・中井延美

本研究は，日本語学校で学ぶ中上級レベルの学習者を対象にアスペクト表現「テイタ」の習得状況を調査し，その課題を明らかにすることを目指す。特に類似形式「テイル」と比較し，学習者の習熟度の差異を検討するとともに，教材や指導の在り方，学習者の時制・アスペクトに関する認識にも注目する。発表者らの教育経験では中上級クラスの学習者は「テイル」について一定の文法知識を持ち，文脈に応じた運用が可能であることが多いが，「テイタ」は知識として定着しづらいと予測した。動詞の種類や用法が異なる「タ」「テイ」に関する文脈補充型選択式課題の回答分布から習熟度差を調査した。その結果，「テイタ」が必要とされる文脈でも「タ」を選ぶ傾向が確認され，教材分析では「テイタ」が独立した文型として扱われていない実態が見えた。これらの知見を踏まえ，学習者の習得段階に応じた系統的な導入と定着を図るための指導法の再検討が今後の課題である。

紅露―大原日本語学院，中井―明海大学

〔2025 年度第 3 回支部集会（関西支部）口頭発表２〕

＊当該発表は、発表者の都合により中止となりました。

〔2025 年度第 3 回支部集会（関西支部）口頭発表３〕

「何を・どう教えるか」を問う

―戦後識字教育研究の現在地と課題―

松下恵子

戦後の識字教育研究は，制度的枠組みや理念的価値に関する議論が主流だったが，教育内容や教育方法の理論的精査は十分に行われてこなかった。本発表では，「何を・どう教えるか」という教育の中身に焦点を当て，学習者の語りや経験をどのように実践へ昇華するかを探る。画一化の危険性や多様性の周縁化を踏まえ，識字教育における内容形成の課題を明らかにするとともに，社会運動や地域実践との接続，比較教育学的アプローチとの融合可能性にも言及する。権利保障を超え，包摂性・柔軟性・参加性を重視した教育内容の再構築を目指す視点を提示する。

松下―関西学院大学

〔2025 年度第 3 回支部集会（関西支部）口頭発表４〕

日常の声がつなぐ共生社会

― 地域シンポジウムに見る市民の役割

中井延美・紅露姫香

本研究は，A 市の国際交流協会が開催した多文化共生シンポジウムの実践を事例に，多文化共生教育における見落とされがちな可能性を探ることを目的とする。近年，外国人住民の増加に伴い，地域社会における共生の重要性が一層高まっている。同シンポジウムでは，外国人生活者や日本人ボランティアらが登壇し，多様な立場から共生の現状について語り合った。準備会議での参与観察記録，当日の外国人・日本人パネリストの発言要旨，参加者アンケートの自由記述のデータを質的に分析した。その結果，スーパーや警察署といった日常の生活空間にかかわる地域の関係者が，多文化共生教育の形成に果たしうる役割が明らかとなった。また，日本語ボランティア，やさしい日本語ボランティアなどによる市民の草の根活動の意義も示された。本研究の特筆点は，地域関係者がシンポジウム当日だけでなく準備段階から具体的に連携していた点を含めて分析していることである。

中井―明海大学，紅露―大原日本語学院

〔2025 年度第 3 回支部集会（関西支部）ポスター発表①〕

日本語会話力向上のためのタスクベース AI アプリ「Gengobot」の開発

―インドネシア人日本語学習者を対象に―

MUMU MUHAMMAD RIFAI

近年、日本ではインドネシア人の労働者と留学生が増加しており、彼らの日本語会話能力の不足が課題となっている。その要因として、文法中心の教育、教材と生活場面の乖離、母語話者との練習機会の不足などが指摘されている。本発表は、この課題を解決するために発表者が開発中の〔インドネシア人日本語学習者を対象とするタスクベース AI アプリ「Gengobot」の紹介〕を目的とする。このアプリは国際交流基金 JF スタンダード Can-do（A1・A2）の「やりとり」場面に基づき、TLBT の三段階（事前タスク・メインタスク・フィードバック）を組み込み、AI と実践的に会話できる環境を提供する。発表では、当アプリについて詳細に紹介するが、これに加えて、ADDIE モデルにより体系的に開発された System Usability Scale を用いた使用感と学習満足度の測定結果を簡単に報告する予定である。

RIFAI―広島県立広島大学大学院生

〔2025 年度第 3 回支部集会（関西支部）ポスター発表②〕

難易度別メール文タスクの設計とその課題

―日本語教師による難易度判定から―

金蘭美・金庭久美子・橋本直幸

本研究は，難易度別に設計したメール文タスクの妥当性と課題を明らかにすることを目的とする。A1～C2 の 6 段階に分類した 36 種類のメール文タスクを作成し，日本語教師 31 名に対して 6 段階で難易度判定を求め，想定難易度と比較した。その結果，中級のタスク（B1・B2）では概ね一致していたが，初級（A1・A2）と上級（C1・C2）ではやや違いが見られた。初級では，想定より難しいと判断したものが 2 件あり，上級では想定より易しいと判断したものが 6 件と多かった。不一致の理由としては，初級では，内容や伝え方の選択肢が広いことが挙げられ，読み手への配慮や説明の負担が難易度を高めていたが，上級では，読み手が疎の関係で用件も苦情など難しいものであったが，伝えるべき要点が明示されていたため，想定より易しく判断した可能性がある。以上からタスクの設計の際には，自由度の調整が難易度に影響しており，特に初級・上級の場合は注意が必要だといえる。

金―横浜国立大学，金庭―目白大学，橋本－福岡女子大学